

都市の景色を彩る

～京都の色～

今 川 朱 美*

(平成19年10月31日受理)

Impressive Colors as an Urban Image in Kyoto

Akemi IMAGAWA-SATO

(Received Oct. 31, 2007)

Abstract

In the course of “Theory of Urban Development” at Kyoto Seika University (second semester, 2007), the first lecture was given on the history of Kyoto and its changes. On this basis I then assigned the students to sample a color item typical of Kyoto and make the report on it. To accomplish their tasks, they required both fieldwork and the use of reference materials. Even for students without any experience of writing reports, the topic was interesting, and I provided a model for them and explained how they should make investigations.

After giving similar assignments for the past some years, I published three papers in the KSU Journal based on statistical analyses of the reports submitted: “The Image of Kyoto Seika University: Utilizing the Techniques of Kevin Lynch’s *The Image of the City*” (No. 25), “Kitsch Design in Kyoto: The Establishment of Architectural Kitsch” (No. 27), “Stories in Which Kyoto Plays a Leading Role: Looking for Kyoto in Literature” (No. 29), and “A Taste of Kyoto: Experiencing Kyoto’s Culture through Its Food” (No. 32). Before the fifth group carried out their assignment I showed them the published papers, which included the names of students from whose reports I cited, and nearly all the students voluntarily submitted their own reports.

In choosing the present topic, I aimed to have the students sample Kyoto’s color culture for themselves, become aware of the long history behind its flavors, and come in contact with traditions unique to Kyoto. Of the 154 reports received, almost half discussed a landscape (the natural greens, the stores and houses, the historical architectures), but most of the topics have something to do with Kimono, lacquered Japanese ware, Kyoto ceramics, etc. The study confirmed the continuity of cultural traditions unique to Kyoto with the presence of many unique local colors. Because it is extracted it from the passage of time, Kyoto’s cuisine is closely attuned to the changing seasons, and Kyoto has made a lot of period flavor colors which rise beyond the times. In conclusion, I suggest that, as residents of Kyoto, by making it part of our everyday life to follow the custom of enjoying a particular treat at a particular time while appreciating the changing of the seasons, we can help preserve the heritage of these unique colors for the future.

Key Words: colorscape, urban design, image color of Kyoto

* 広島工業大学工学部都市建設工学科

1. はじめに

まちづくりを考える上で、その地域の歴史のみならず、生活や文化を知ることは重要である。また、「色」をたどることは、その国の文化をたどることだとも言われており、色とは単なる色彩の現象ではなく、様々な事柄を伴って存在している。色の意味を追求すれば、その地域の風習や価値観、美意識などをさぐる手がかりとなることはいまでもない。近年では、景観の要素としても色彩が重要なキーになっていることが認識され、「美しい景観＝色彩の美」であるとも言われている。地域計画の手法として、地域のイメージカラーを戦略的に使用する例も見られ、景観条例などによる色の規制も盛んに行われるようになった。

京都では、2008年度早期導入を目指した新景観政策で、建築物の外壁の色を、色相・明度・彩度で数値化した「マンセル値」を用い禁止色を指定している。しかし、ここでは、望ましい色や夜景については触れていない。今後「色」

は、都市・地域計画の分野においても、取り組まねばならないテーマの1つであると認識している。

そこで、京都精華大学で2006年度「まちづくり論」を担当した際に、この講義を履修した学生に「京都の色」と題するレポートの課題を与えた。京都といえば、どんな色をイメージするのか。その色は京都のどこにあるのか、実際に見に行き、色を確かめて、その色はどのような色なのかを調べるようにと説明をした。150名の履修学生から、152本(106色)のレポートの提出があった。履修学生数とレポート数が一致しないのは、希望者はレポートではなく期末テストにより単位を取得したこと(レポート免除)、興味があり数本のレポートを提出した者(レポート数増加要因)がいたためである。そのレポートを基に、京都の色について考察し、色も京都の文化成立に大きな役割を果たしていることを理解しようというのが、目的である。

まず、提出されたレポートをカテゴリーごとに分類し、表1～5にまとめた。

表1 歴史的建造物(庭)から抽出された色

色	抽出された色	件数	イメージ
	朱色+白砂利+深緑の色	1	伏見稲荷の稲荷大社
	朱色 (R254 G51 B15)	3	平安神宮大鳥居, 平安神宮, 下鴨神社
	朱(丹土(につち))	4	平安神宮大鳥居, 八坂神社, 伏見稲荷
	葱色(萌葱色・萌黄色・浅葱色)	1	今宮神社, 八坂神社
	朱+群青色(緑銅色)	1	平安神宮
	朱+緑	3	鞍馬寺, 下鴨神社: 糺の森(森)+相生社(鳥居)
	レンガ色+コケ色	2	インクラインなど蹴上げのレンガ建造物
	煉瓦 (R65 G24 B20)	1	琵琶湖疎水水路閣
	煉瓦 (R181 G82 B51)	2	同志社彰栄館, 同志社有終館(※1)
	煉瓦 (R89 G37 B35)	1	京都国立博物館
	茶	1	京大時計棟
	灰色 (R120 G95 B84)	1	京都御苑: 石垣
	白	1	上鴨神社: 白砂利(※2)
	土壁色	1	佛光寺: 土壁
	黒	4	清水寺(+桜・紅葉), 銀閣寺(+雪), 東本願寺
	燻(くす)んだ色	1	真如院
	黒に近い茶色 (R24 G10 B9)	1	東福寺, 蓮華寺(+緑)(※3)
	茶褐色 (R102 G64 B50)	2	建物の壁(こげ茶色・茶色・灰色掛かった茶色・クリーム色・白色)
	赤茶 (R187 G85 B53)	1	清水寺: 本堂扉
	赤みを帯びた黒	1	心霊現象: 地主神社, 安井金比羅宮, 木島坐天照御魂神社
	深紫 (R73 G55 B89)	1	銀閣寺(様々な風景が溶けてまざった色)
	桔梗色 (R86 G84 B162)	1	谷性寺(秀吉寺 or 桔梗寺)
	緑銅色 (R102 G175 B141)	3	京都市立美術館の屋根, 佛光寺の鐘(※4)
	茶+金↔灰色	1	古木材から生命感(再生)を感じる↔灰色: 死の色(近代)
	金 (R255 G220 B92)	3	金閣寺, 祇園祭の鉦

表2 町並から抽出された色










色	抽出された色	件数	イメージ
	弁柄(べんがら)色 (R143 G46 B20)	3	町並み(町屋のべんがら)
	白	1	京都タワー
	オレンジ色	1	ライトアップされた京都タワー
	乳白 (N-945)+蒲色 (N-740)	3	マクドナルドの看板(京阪七条店), 王将の看板, 京都中央信用金庫
	藤紫 (R165 G154 B202)	1	市バス(行き先表示板), 京都サミット(サイン) (※5)
	臙脂色(えんじ)	2	ヤサカタタクシー, 阪急電鉄
	黄色に近いオレンジ	1	築地:アンティークなインテリア
	露草色 (R0 G138 B205)	1	喫茶「ソワレ」の照明の色
	透明	1	御池シンボルロード「無」

表3 自然風景(歴史・庭含む)

色	抽出された色	件数	イメージ
	苔色 (R73 G157 B27)	2	東福寺
	苔色 (R105 G130 B27)	3	大原三千院, 西芳寺の苔庭, 天寿国繡帳 (※6)
	萌黄色 (R170 G207 B83)	1	大原三千院
	青朽葉 (R142 G173 B81)	1	大原三千院
	鶯色 (R60 G127 B47)	1	大原三千院
	鶉色 (R215 G207 B58)	1	大原三千院
	鶉茶色 (R105 G140 B98)	1	大原三千院
	木賊色 (R59 G121 B96)	1	大原三千院
	緑と赤	1	大原三千院, 庭の緑と鯉・毛氈・傘の赤
	深緑	1	竹林
	紫紺 (R70 G14 B68)	1	紫竹, 紫野=緑の竹に赤い血→乾くと紫に見える
	赤(楓) + 竹(若竹色)	1	大徳寺高桐院
	カエデ(紅葉)の色(赤・黄)	4	圓得院(南禅寺天授庵), 高台寺(天龍寺), 宝蔵院, 永観堂, 曼殊院
	橙 (R254 G119 B51)	1	醍醐寺の紅葉
	カーキ (R108 G133 B77)	1	岩倉:竹林
	水(深緑・グレー・茶・・・)	1	鴨川=他の色は鴨川に映える色になっている
	藤紫 (R187 G188 B222)	1	山紫水明:頼山陽の居(東山36峰+鴨川)
	黄蘗 (R251 G226 B81)	1	炎色:鞍馬の火祭
	萱草色 (R252 G159 B77)	1	炎色:鞍馬の火祭
	黄丹 (R240 G94 B28)	1	炎色:鞍馬の火祭
	臙脂色 (R179 G66 B74)	1	祇園祭(貝殻虫で染めた) (※7)
	猩々緋 (R201 G48 B27)	2	能の舞台(シテ), 錦鯉
	白	1	浄香の灰(京都南禅寺)
	薄雲鼠	2	雪景色:精華大学
	常盤緑 (R2 G135 B96)	1	八坂神社:垂れ幕
	深紅	1	毛氈

表4 着物や趣向品, 美術品から抽出された色 (文学含)

色	抽出された色	件数	イメージ
	金 (R255 G220 B92)	1	金箔
	紫 (R49 G44 B75)	1	藤色
	苔色 (R71 G86 B45)	1	着物
	黄丹 (R223 G164 B47)	1	田畑コレクションの着物
	役者色(路考茶, 梅幸茶, 高麗納戸)	1	江戸時代庶民の服装: 役者舞台衣装などの茶・鼠・納戸を貴重とした色(※8)
	京紫 (R157 G91 B139)	2	祇園祭: 浴衣
	白鼠(銀)	2	宮脇賣扇庵(かわほり), 着物
	白	3	和紙, 白化粧(おしろい), 胡粉
	カエデ (R135 G75 B75)	1	文様としてのカエデ
	金 (R255 G220 B92)	1	二条城襖絵, 洛中洛外図
	岩緑青 (R73 G142 B92)	1	源氏物語絵巻
	萌葱色 (R135 G181 B69)・浅葱色	1	源氏物語絵巻(絵), 今昔物語(和歌), 玉勝間(文書)
	春: 桜色 (R253 G226 B226)	2	枕草子
	夏: 蛍	1	枕草子
	秋: 夕日 (黄色に近いオレンジ)	2	枕草子, 岩倉の夕日
	冬: 雪 (白〜薄雲鼠)	2	枕草子
	紫+橙 (R206 G113 B38)	1	ちりめん細工
	雲母 (輝きのある白)	1	京唐紙
	本朱 (R107 G0 B0)	1	漆の色
	洗朱 (R203 G29 B14)	3	漆の色, 和傘
	漆黒: 呂色 (R24 G20 B29)	1	漆の色
	黄漆 (R196 G130 B49)	1	漆の色
	溜塗 (R137 G50 B28)	1	漆の色
	白竹 (R187 G120 B11)	1	木竹工芸: 株式会社御池 の家具
	煤竹 (R17 G16 B11)	1	木竹工芸: 株式会社御池 の家具
	紅木 (R22 G19 B19)	1	木竹工芸: 株式会社御池 の家具
	黄楊 (R185 G42 B15)	1	木竹工芸: 株式会社御池 の家具
	桐 (R185 G122 B11)	1	木竹工芸: 株式会社御池 の家具
	桑 (R79 G10 B8)	1	木竹工芸: 株式会社御池 の家具
	染付 (R39 G38 B114)	1	清水焼(酸化コバルト)

※8 > 役者色 (表4)

江戸時代に入ると、出雲大社の巫女から身を起こしたといわれている阿国(おくに)が、京都で歌舞伎踊り興行するようになった。阿国歌舞伎は、女歌舞伎、遊女歌舞伎と呼ばれ、演目が風紀上望ましくないとする理由で、女性が舞台上上がることを禁じられた。その後、野郎歌舞伎(男性が女形を演じる)が、江戸、京、大阪にて繁栄し、多くの名優を生んだ。歌舞伎役者の人気から、役者が好んで身に着けた色が町でも流行し、役者色と呼ばれている。

また、江戸幕府から、庶民の服装が華美になるのを戒める奢侈禁止令や儉約命令の発布により、木綿を主体とした地味な着物を強いられたが、茶・鼠・納戸はおかまいなしとされたため、呉服店が人気の歌舞伎役者にちなんだ柄行の織物を流行させた。

図1 市川蝦蔵の竹村定之進 (出典: 参考文献²⁾ p.46)

表5 食から抽出された色

色	抽出された色	件数	イメージ
	鶯萌黄 (R130 G174 B70)		ようじやカフェ:抹茶パフェ
	抹茶色 (R197 G197 B106)	3	都路里(抹茶, 抹茶パフェ, 抹茶白玉), 和ごころ(アイスクリーム) (※9)
	璃寛(りかん)茶 (R106 G93 B33)		都路里:抹茶, 抹茶パフェ
	鶯茶 (R113 G92 B31)		都路里:抹茶, 抹茶パフェ
	抹茶色 (R43 G50 B12)		一乗寺 中谷:抹茶ティラミス
	利休色 (R143 G134 B103)		都路里:抹茶, 抹茶パフェ
	利休茶 (R165 G149 B100)		都路里:抹茶, 抹茶パフェ
	素 (R200 G175 B128)		仙太郎(和菓子) 京都の和菓子はくすんでいる?
	白茶(しらちゃ):R221 G187 B153)	4	八つ橋:淡い茶系の饅頭の皮+餡子, 煎茶
	朱色 (R205 G62 B54)		金時人参(錦商店:かね松) (※10)
	紅色 (R123 G23 B47)		赤かぶら
	桜色		春:桜餅
	白 (R244 G236 B219)	2	白味噌仕立ての雑煮, 胡粉, 豆腐, 湯葉,
	白	2	湯豆腐・聖護院大根
	代赭 (R187 G85 B32)		サボンカフェ:カフェオレ
	四十八茶(赤茶, 黄茶, 緑茶)		番茶, 煎茶, 抹茶

2. 時間を重ねて創られた色

たとえば、100年以上の時間を経た木材が、黒く鈍く輝く色、古い町屋が軒を連ねることによって作られるモノクロームな背景に、色鮮やかな暖簾が映える。または、一見、水墨画のような寺内にも木々の緑や、毛氈が目をはいたり、その空間にたたずむと、赤みがかった黒や、黄色く艶のある黒が見えてくる。そんな風景が京都には存在する。

そういった時間を重ねて完成する色を、くすんだ色、すすけた色としてレポートした学生らは複数人いたが、着目点異なるため、抽出された色にばらつきがあった(表1・表2)。また、時間を重ねて生み出された木材の黒い色と、桜、緑、紅葉、雪と、のハーモニーを美しいとし、そのための黒だと論じた者が、それぞれの季節ごとに見受けられた。逆に冬については、京都の町並み(町屋の黒い瓦や木材)によく映えるから、という理由で雪の色を京都の色とした者もいた。

木材だけでなく、金属も時を経て、表情をやわらかにする。京都では明治期に、多くの公共建築物が煉瓦造・銅葺屋根で建てられたが、その屋根も竣工当初は黄銅色で輝いていたであろうが、現在では緑銅色に変容している。周囲の樹木の緑とは違い、霞がかかったようなやわらかな緑は、鳥居の赤のみならず、着物姿の女性などをひきたてる背景として、京都の町並み形成に貢献している。

木材、金属ともに、時間を重ねることによって、色が沈み深みを帯び、他の色に寄り添い同化し、主体性を持った

脇役として京都のまちを構成するようになる。我々が建築物を計画するとき、色を与えるのではなく、周囲の風景と時間から得るべきなのではないかと、考えさせられた。

歴史的な庭園からも、選出された色があった(表3)。白砂利、苔、紅葉などである。この中で、苔は時間を必要と



黒に近い茶色(※3)
(R24 G10 B9)

風雨、雪にさらされてきた、深みのある木の色は、歴史とともに風格を感じさせる色になる。

図2 東福寺
(205P010 石見まり)



緑銅色(※4)
(R102 G175 B141)

京都のまちの抑えた色彩の中で「澄んだグリーン」は一際目を引く。京都にはこの色が多い。

図3 京都市美術館
(205V029 林亜侑美)

煉瓦色 (※2)
(R181 G82 B51)

建築用材としては、幕末より国内で焼成されていた煉瓦であるが、官公庁や学校が西洋の建築様式で建造されるようになって、煉瓦色が定着したと考えられる。煉瓦の色は、赤・橙・茶・黒と多彩であるが、華やかな赤煉瓦が煉瓦色として主導権を持つようになったようである。京都には多くの近代建築が残るが、水路閣、同志社の彰栄館・礼拝堂・有終館などが、赤煉瓦で造られている。なお、右図の同志社の彰栄館・有終館は、共に重要文化財に指定されている。

(206WD02 安江篤史)



図4-1 同志社の彰栄館



図4-2 同志社の有終館

するものである。苔を庭園に広げようと思うと長い時間を必要とし、だからこそ歴史ある苔は価値があると考えられている。京都には、苔のある庭園で季節折々の緑を鑑賞することを楽しむ人も多く存在する。



図5-1 三千院



図5-2 青蓮院

苔色 (※6)
(R105 G130 B27)

古木の幹につく苔類、藁ぶき屋根や石燈籠の苔色…社寺の庭園にみる苔色の陰。

三千院や青蓮院の苔色は、京都の深い歴史を感じさせるとともに、人々の古くから日本の苔色のみどりに寄せる思いというものを呼び起こす。

(205J048 三原悠希子)

このようなことから、苔の緑を京都の色に選んだレポートが11編あった。一般的な苔色は図5に示すものであるが、自然の苔の色は種類により、そのバリエーションは広い。実際に庭園を撮影し、写真より色を抽出したオリジナルの苔色を示したレポートもあった。

時間をかけて使い込むうちに、艶を帯び色が良くなるものとして、木竹工芸、金工芸など、が挙げられる(表4)。竹細工は、青竹のみずみずしい竹筒、茶褐色の籠など生活用

品として京の暮らしとともにあった。特に茶の席で使う場合などは、時を経て艶のある籠を好んで使う。寂(さび:古びて趣がある、枯れてしぶみのある,)を愛でる習慣がある京ならではの感性かもしれない。蒸籠(せいろ)など調理具も、使い込んだものの方が使いやすい。竹以外にも、柘のくしや、霧筆筒(きりだんす)など、道具類は使い込むほど味も出る。金属も同じく、簪(かんざし)などの装飾品、刀などは、代々引き継がれ、大切に使用されてきた。時とともに色合いが変化を見せるさまに、自分たちの生きざまを写し見ていたのかもしれない。例えば霧筆筒は、女兒の誕生時に霧を植え、嫁入時に筆筒に加工して持たせたというから、女性の嫁入りから、共に年を重ねて女性の人生を表すように、色が淡くなったのである。

3. 日本古代史の色

原始において、色は「あか、しろ、くろ、あお」の4色しか認識されていなかった。色彩と言うよりは、明暗の段階を意味し、夜が白け、太陽は赤く、夕暮れ時は青く、闇は黒い、というものであったと考えられている。

こういった日本古来の4色それぞれに関するレポートがあった(表1)。ここでは、4色のうち、青を紫に読み替えてまとめている。

①厄除け - 赤・朱

太陽が昇ると日が「アケル」、から「アカ」という言葉が生まれた。まさに、アカは神の色であった。陽と火への畏敬を赤に託し、悪魔を寄せ付けない色とされてきた。そして、政治的・宗教的なシンボルとして、朱塗りの柱の建物が建設され、藤原京も平城京も、南北に走る中央通の南側に朱雀門が建てられた。

京都では、建都1100年時に平安神宮が建設され、その参道南側に昭和天皇大礼を記念して大鳥居が建造された。この鳥居の朱をシンボルとした者は、6人いた。また、16人



平安時代に流行した疫病は、恨みを残して亡くなった人の怨霊によるものと考えられ、神仏に祈りをささげ、祟りを沈めようといわれた、祇園御霊会(869年)が行われた。それが、祇園祭の起源であるとされる。山鉾には様々な赤(朱)が見られる。

図6 祇園祭 (※7)
(205D010 北野百香)

の学生が、赤・朱や緋色を京都の色だと言う。その中には、緑と鳥居など、他の色との対比色の1つとして選んでいる学生もいる。一割強の学生がこの色を京都の色としたのは、予想通りであった。

②尊い色－白・素

古来、白は清浄さ、潔白、高貴、神聖などの意味として使われており、古事記や書紀によると、白い布は神に捧げる物であった。神に仕える者は、白い装束を身にまとい、白酒を清めに使い、神の属性として登場する動物は白馬、白象、白鹿など、白にちなんだものである。このような神秘的なものや、王族など尊い白を「ハク」と呼び、人工的に漂白したりしてつくられた白を「シロ」とし、色相を表わすときなどに用いた。

それに対し「素色(しろいろ)」もあり、こちらは人が手を加えない天然の色という意味が強い。例えば、稲羽之素兎(いなばのしろうさぎ)の素兎とは野兎のことで、冬は体毛が白いが春になると茶になる。これは、人間の手が加えられていない自然の色ということである。この素の色を京菓子より見つけ出し、レポートした者がいた。素を含み、白を選んだレポートは14編で、全体の1割弱が白を京都の色としている。



図7 上賀茂神社の白砂(※2) (205H008 川口裕子)

③日本の紫(表5)

紫は、時代により彩度や明度を変えながらも、貴重な色として扱われてきた。聖徳太子が制定した冠位十二階において最終的に最高位に定められたのは、紫草の根(紫根:しこん)によって何度も染められた濃紫(黒紫)であった。少し赤みがかかった京紫は、古代紫とほぼ同色であり、紫根で染め、椿の灰で発色したものである。それに対して、少し青の強いのが江戸紫、など多くの紫があり、紫の数だけに染めの手法がある。平安時代になると紫は、優雅な色、愛しき人の色、という意味を持つようになる。この紫を、京都の色に選んだ学生は、6人であった。



京紫 江戸紫 紫

京都の町でよく目にする市バスの行き先案内は紫。また、2008年に開催される関西サミットを京都で、という運動があるが、垂れ幕も紫を使用している。

図8 「サミットを京都に」の垂幕(※5) (205V021 出羽隆浩)

④黒の五彩(表5)

白に黒を加えることによって書画は成り立つが、その黒は「五彩」を秘めると言われており、墨の濃淡を「焦・濃・重・淡・清」で表現する。「清」には、白鼠・銀鼠・素鼠・井鼠・墨色があり、「淡」にあたる鼠色は、錫の色に近いことから錫色とも呼ばれる。

このモノトーンの世界は、中国・日本の水墨画や書の中で成熟してきた。この世界観が近年になって日の目を見たのは1980年代のことである。世界中で近代化・工業化が進み、ビビットな色のプラスチック製品が自由自在に生産されるようになったのが1960年代。その反発からも1970年代はアースカラーやナチュラルカラーが、ファッションに取り入れられ、その後1980年代になって、黒を主体としたコーディネートがインテリア界を中心に広がった。もともと黒の五彩を使いこなしてきた日本人には、なじみが良く、今でも「黒～灰～白」を貴重としたデザインはいたるところで見られ、日本的なデザインと評されている。この黒から薄い鼠色までの色を京都の色とした者は7人であった。



図9 黒の五彩

4. 古代の色－五味五色五法

古代、奈良時代になると中国古代の陰陽五行説が伝来した。宇宙現象「転地・陰陽」の作用は、「木・火・土・金・水」の5つの「行」を基本として、五方(方角)五時(季節)、五臓(身体)、五感(感覚)と、あらゆるものが「五行」に当てはめられ、そのバランスを考えられてきた。「五味五色五法」は、五味(辛・甘・酸・鹹(かん:しょっぱい)・苦)、五色(青・赤・黄・白・黒)、五法(生・煮・焼・揚・蒸)を指し、五種の味と色と調理法を食卓に並べると健康的な食生活が送れると考えられてきた。

その中の赤に着目した者がいた。煮物の中に西洋人参が使われていると、味・色共に違和感を覚えると言う。金時

人参（別名：京人参）は、江戸時代に中国から渡ってきたといわれているため、近年になって京料理の食材に加わったにもかかわらず、その色の深さと甘みは、京都に欠かせないものとなっている。



金時人参（※7）
（FF473E）

西洋人参
（E27945）

図10 赤い京野菜
（205V034 三宅宗一郎）

京の人々は、人参のみならず、赤いものを金時さんと呼んでいる。金時芋、金時豆、赤子（乳児）をも、金時さんの愛称でよび、健康的な赤のイメージを身近に感じている。五行の中では、赤は南に住む朱雀（太陽のシンボル）を意味し、古来より、お天道様をあがめてきた日本人には親しみやすかったのではないかと。加えて、先にも述べたように、身を守る厄除けとしての意もあることから、5つの行のうち、最も身近な色となったのかもしれない。

五色「青・赤・黄・白・黒」が日本で取り扱われるようになった際、正当な地位のある人にそれぞれの色が与えられ、地位を示す色となった。大和の国で608年に制定された冠位十二階において、最高位の親王の地位が認められたのが685年、それからわずか16年間は、その「明」という位を朱色と定めていた。その後は、色の品位と染色としての価値が高いため、紫を尊んだ構成となり、明の位は黒紫となった。

近世以降、日本の五色は、日本では縁起が悪いとされる黒を紫に読み替えるということを行うようになり、七夕の五色の短冊は「青・赤・黄・白・紫」を示す。仏事に使う五式幕では黒を緑として「青（紫）・白・赤・黄・緑」で構成されている。



五色幕のそれぞれの色は、「成所作智・平等性智・法界体性智・大円鏡智・妙観察智」と、5つの智慧（ちえ）を表す。

図11 光明寺御影堂

5. 京の伝統の「技（わざ）色」

平安貴族による宮廷でのくらしが唐様文化から和様文化を生み、鎌倉期の禅文化、室町期の唐物文化、桃山期の南蛮文化、江戸期の西洋文化といった移入文化や芸能文化

が、特異な京文化を形成し、伝統として受け継がれてきた。このような1200年の文化の変遷を、形や色に包含した伝統工芸品が受け継がれてきた。その伝統工芸品から、京の技の色を挙げる。（表5）

例えば、西陣織や友禅染、丹後ちりめん、など京都に現存するきもの町には、風合いのある織や染があり、優美な色彩がある。その色は、季節によって移ろうものであり、二月のくれない色の梅は「紅梅色（こうばいいろ）」、五月の青々とした竹は「若竹色（わかたけいろ）」など、古都京都は、季節ごとにさまざまな自然や草花の情景を色に映し、和の色をつくりあげたのである。

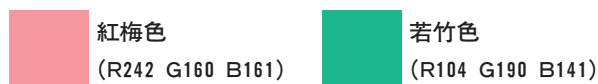


図12 2月の色・5月の色

漆工芸品のうち、京都で作られるものを「京塗」と呼ぶ。京塗は、貴人たちの洗練された美意識と教養によって、家具、調度品、器が製作されてきた。塗漆の技法が16種あり、技法により、作品の色も変わってくる。しかし、基本的に8色「呂色（黒）・本朱・洗朱・うるみ・紅溜・青漆・浅黄・黄漆」しかない。朱については4色あるが、この朱によって時代を見ることができる。本朱（ほんしゅ）は古代朱とも呼ばれ、中世の京都においては、黒を貴重として本朱を対比さすことによって、赤を演出した。近世になると、黄味の朱が好まれ、洗朱が喜ばれた。



図13 古来からの漆の色

陶芸も「京焼」と呼ばれ、染色や漆芸と密接なかわりを持ち、互いに意匠を共有してきた。色もそれぞれが、なじむように、例えば、同じ食卓に並んだときに調和が取れる落ち着いた華やかさを彩る釉が好まれ、赤絵（古清水）瑠璃（栗田）、染付（清水）など、色に名称がつけられ、受け継がれている。

京塗や京焼の器に、詫びや華やぎがそえられる京料理、京菓子、そして茶の世界にも、季節と伝統がみなぎっている。食にかかわる色（表6）では、抹茶のお菓子に含まれる色が7色挙げられている。京都には、平安初期に嵯峨天皇が造茶所を設けたといわれており、それ以来茶の文化が発展し、現在に至る。茶葉から入れるお茶の色を示した者は1名であったのに対し、抹茶に関わる色を選んだものは9名であった。いかに、京都＝抹茶、というイメージが強いかをうかがわせる。さらに、抹茶本来の色を示したものは9人中3人であり、本来の抹茶色とは異なる、渋みのある緑がイメージされていることから、近年になって菓子メー

カーなどが京都シリーズとして販売している抹茶味の駄菓子、本来の抹茶の色をしのぎ、新・抹茶色として定着しつつあることが判明した。本来の柔らかな抹茶色では、人目を引きにくく、菓子のパッケージでは、強い緑を抹茶のイメージカラーに定めたのであろうが、京の色を問われたときに、本来の抹茶色よりも、後世に造られた抹茶色がレポートされるのは、残念である。



図 14 抹茶

抹茶色 (※6)
(R197 G197 B106)

青～緑の色は、日本画で多く見られが、西洋画の絵具では、豊富にない。

(205S013 田中重優)

6. 季節の色とかさねの色目

平安の配彩美として、「重色目」あるいは「襲色目」というものがある。あわせ仕立ての衣の表裏や、装束として、衣を重ねる際の、衣色の配色のことである。これらの色目は、服飾史、風俗史、色彩文化史などによると、平安時代末期に源雅亮の「満佐須計装束抄(まさすけしょうぞくしょう)」が最古の著書であり、次いで室町時代応永の頃の一条兼良の著とされる「女官飾鈔(じょかにかざりしょう)」が存在する。どちらも京都が都であった時代の女房の襲色目が図表で示されている。平安期から鎌倉・室町期の色目を知ることができる貴重な資料であるが、女房の単(ひとつえ)・五ツ衣(いつぎぬ)、表着(うわぎ)、小桂(こうちき)と、より多くの色配合が見られるのは後者である。

ここでは、京都をイメージしたときに、「赤+白」といった、複数の色のハーモニーをもって、京都らしいとしたものについて、記述したい。

かさねの色目をみると、基本的に植物を表現するもので、春は梅をイメージする赤に始まり、若い緑、董色、山吹色が登場する。それらの組み合わせにより、季節感を表現している。例えば、5人が選んでいる赤と緑の組み合わ

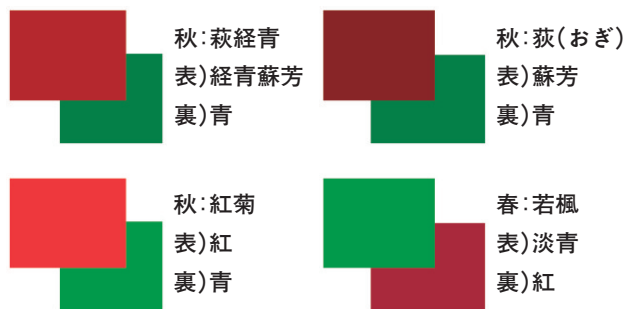


図 15 かさねの色目「赤+緑」

せを取っても、主なものとして、以下の4つがある。微妙な色の違いと対比によって、表現する植物が違ってくる。

赤と白と緑の取り合わせもレポートされているので、春・冬にある衣の例を挙げる。朱と白砂と木々の緑を美しいと感じ、この取り合わせが京都の色だと述べたのは、現代人であるが、平安の人々も、同じ色合いを美しいとしてかさねる衣の色に取り入れていた。



図 16 かさねの色目「皆紅(みなくれない)の衣」



図 17 かさねの色目「柳」

とすれば、色が氾濫するようになって日本人の色彩感覚は弱まったと言われているが、風景から色を抽出する能力を持ち、その色合いが、色に対して繊細な感覚を持ち備えていたといわれる平安の人々の愛した色合いと同じであるならば、現代の我々が、再び平安の色彩美を呼び起こし、次世代に伝えることは不可能ではないはずだ。

7. おわりに—京都の「色」を伝承するために

京都には、まだまだ独自の文化が多く伝承されており、京都ならでわの季節を楽しむ催事も数多く存在する。それらの催事には、暗黙の色合いがあり、その趣向は母から子へと伝えられたものである。残念ながら、季節の移ろいを楽しむ余裕のない現代社会では、気候による自然の変化に気付かず、盆、正月、クリスマスなどのイベントによって月日の流れを確認することが多いのではないかと

先にも述べたが、時々刻々と変わるマーケットに支えられた流行色の存在と、氾濫する色は、我々の色に対する感性を弱めていると指摘されている。人工的な色を次々と消費する我々は、色というものが、自然景観の中にある色を楽しみ、その色をくらしに取り入れることによって心を満たしてきたことを思い出す必要がある。

本来日本人は、「熟(なれ)」と、谷崎潤一郎が「陰影礼賛」の中で表現しているように、作られたものをそのまま享受するのではなく、使い込んで時間が経過した後、美的完成に近づいたものを自分のものにしてきた。色もしかし。町並みや建物物は雨風にさらされ、工芸品は人に使い込まれて、人に馴染んだ色となるのである。

この豊かな色彩を、未来にも残しておくためには、まず、色を感じることはないか。日々の暮らしの中で、季節の

移ろいを感じながら、その時々の色を楽しめるようになれば、京の「色」を伝承していくことができるのではないだろうか？

今回の調査を行った受講生のほとんどが、改めて京都の色というものを考え、その色の持つ意味や歴史に驚き、その体験を喜び、他にも美しい色も探したい、とレポートを結んでいる。京都には、この地域にしかない色彩文化があ

り、それぞれの色には物語(由来)があるということを知ってもらえたことも、京都の「色」文化伝承に、貢献したと言えるよう。

参 考 文 献

- 1) 長崎盛輝「かさねの色目」青幻社, 2001
- 2) 藤井健三「京の色辞典 330」平凡社, 2004